

70

三浦命助

(一八二〇―一六四)

●南部藩百姓一揆は何を要求したか

渡辺 尚志(二橋大学助教授)

三浦命助とは

三浦命助は、幕末の代表的な百姓一揆のひとつ、南部

三閉伊通一揆の指導者の一人です。命助は、

一八二〇年(文政三)に、陸奥国上閉伊郡栗林

村(岩手県釜石市)に生まれました。栗林村は

当時盛岡(岩手県盛岡市)に城をもつ南部藩の領地でしたが、南部藩領は近世を通じて百姓一揆が多発していました。

命助が生まれた三浦家は、村役人を務めるような村内でも上層の家柄でしたが、生活はそれほど楽ではなく、命助は若い頃から鉾山に出稼ぎに行ったり、馬に荷物をつけて諸方を売り歩いたりしていました。

三閉伊通一揆

三閉伊通一揆は、一八五三年(嘉永六)に起こりました。三閉伊通とは、現在の岩手県の陸中海岸沿いの一帯を指す言葉です。三閉伊通では一八四七年(弘化四)に

も大規模な一揆が起こっており、その後も不穏な状況が続いていましたが、一八五三年五月に至って百姓たちの不満が再度爆発したのです。一万人を超える百姓たちは、いくつかの打ちこわしを行いつつ南下し、六月六日には藩境を越えて仙台藩領に入りました。彼らは仙台藩に五二カ条に及ぶ願書を提出しましたが、そこには農業にかかわる要求だけでなく、漁業にかかわる要求も含まれていました。たとえば、海産物の売買が近年許可制となり、免許料を払わなければ商売ができなくなったので迷惑しており、こうしたことはやめてほしい、という要求がそうです。すなわち、彼らは自らを「百姓」と規定していましたが、近世の「百姓」とは漁民をも含んでいたのです。

また農民であっても専業農家は少なく、命助のように出稼ぎや商売にも携わる「兼業農家」のほ

うが一般的でした。近世の百姓とは決して専業農民と同義ではなく、農業を含む多様な生業に携わる人々からなっていたのです。

また、一揆勢の要求項目の中には、年貢負担の軽減と並んで、さまざまな商品生産に関する項目が入っていました。たとえば、この頃村々で藍の葉を用いた染色業が広く行われるようになっていましたが、藩から禁止されて迷惑である、従来通り認めてほしい、という要求があげられます。こうした対抗関係は、近世後期に百姓の間に商品・貨幣経済が浸透して商品生産が盛んになり、それ

を目を付けた藩が商品生産への課税・統制を強めたために生まれたのです。

近世後期の百姓一揆は、稲作中心の農業に従事する百姓と彼らから重い年貢を取り立てる領主との対立という図式だけで理解できるものではなく、経営のなかでさまざまな商業的農業(商品生産)

や農産加工の比重を高めつつある百姓とそこへの課税を強化しようとする領主との対抗という側面が強まっていたのです。

こうして、一揆の要求項目から、一揆に結集した百姓たちが農業だけではなくさまざまな生業に従事しており、また農業の中身も自給自足的生産から多様な商品生産へと変わってきていたことがわかるのです。こうしたことはこの地域だけのことでなく、全国各地に共通して言えることでした。

百姓が藩主の交替を要求

三閉伊通一揆では、百姓たちの日々の暮らしかかわる経済的要求の他に、南部藩政の根本にかかわる政治的要求も提出されました。その中心は藩主の交替要求です。それは、現藩主に代わって前藩主を再度藩主にしてほしいと言うものでした。さらに、それが駄目なら、三閉伊通の百姓をすべて仙台藩伊達家の百姓にしてほしいとか、三閉伊通の土地を幕府が没収して幕府領にしてほしいといった要求も出されました。

百姓たちが、藩主や領主の交替を要求するなど近世社会の建前からは考えられないことでしたが、一揆勢は堂々とこうした要求を出したのです。もともと、これらの要求は通りませんでした。

さて、仙台藩領に越境した一揆勢は、六月中に代表四五人を残して南部藩領に戻りました。三浦命助は、この四五人の内の中心的存在だったのです。代表たちは、仙台藩や南部藩の役人たちと粘り強く交渉を続け、ついに一〇月下旬には要求項目の多くを南部藩に認めさせることができました。しかも、百姓側は一人の処罰者も出さずに済み、この一揆は百姓側の勝利で幕を閉じたのでした。

惣百姓一揆

幕末に近づくにつれて、百姓内部での貧富の差が拡大し、貧しい百姓が豪農を打ちこわす世直し一揆が増加してきますが、三閉伊通一揆は村役人の家格をもつ命助が頭取となっているように、貧農から村役人層まで幅広い層の農民たちが立ち上がった惣百姓一揆でした。近世中期に頻発した惣百姓一揆は、幕末に至っても依然かなりの頻度で起こっていたのです。

一揆に勝利した命助は栗林村に戻って以前の日常に戻りましたが、翌一八五四年(嘉永七)安政(元)に村内のトラブルに巻き込まれ、南部藩の吟味を受けている最中に一人で出奔し、仙台藩領に行つて山伏となりました。やがて、一八五七年(安政四)、命助は南部藩領に戻った時に捕縛され、城下町盛岡の牢に繋がれました。それから獄中で六年七カ月を過ごし、一八六四年(文久四)元治(元)二月一〇日に四五歳でその生涯を終えたのです。

三閉伊通一揆が起こった年にはペリーが来航していますが、この両事件は、こののち幕藩体制が内と外から大きく揺さぶられて解体に向かうことを告げる象徴的な出来事でした。